

第17話 (9頁) オオカミのひるね

子どもたちが脱穀場*に行き、「オオカミと羊ごっこ」をはじめました。ミーシャがオオカミになりました。

ミーシャはさおを使って、干し草の山によじのぼりました。干し草の上は、ふんわりやわらかだったので、ミーシャは横になりました。

羊はコーリャとナースチャでした。ふたりはオオカミを待っていましたが、オオカミが来ません。オオカミをよんでみました。ミーシャが見つからないので、ふたりは行ってしまいました。

おかあさんが来ました。ミーシャはどこだろう？ 森に行き、畑に行ってみました。ミーシャはいません。おかあさんは脱穀場にやってきました。

「ミーシャ！ おーい、ミーシャ！」

するとミーシャが

「ぼくここだよ、ねてたんだ。さおがたおれてしまって、どうやっておりたらいのか、わからなかったの。」

*脱穀場…小麦のつぶをほから取りだすところ

「子どもたちの世界の話だけど、なかなか意味深だよ。」

「ミーシャは『オオカミ』役を放棄して寝入っちゃったんだから、これでは遊びは成立しっこない。」

「追いかけれられ役のコーリャとナースチャがミーシャを呼んでも全く応答がない。だからといって、勝手にゲームを止めてもいいのかな、仕方ないのかな、と二人の方にも少し引っ掛かるね。」

「あとでミーシャのおかあさんが心配して探しに来ているぐらいだから、やっぱり、二人がおかあさんに、ミーシャがいなくなったことを知らせておけばよかったんだ。」

「そこまで小さい子に求めるべきかどうか…。無邪気のなせる行為だと素直に考えればいい気がするけど。」

「ミーシャは気持ちがよくて、どのぐらいの間、寝ていたんだろうか。もう遊びのことはすっかり忘れてしまったのだろうか。」

「『さおがたおれてしまって』下りられなかったという、ミーシャの説明は、きっと嘘をついているんじゃないか。」

「えっ、何のために？ でも、うーん、そう解釈できる余地もあるかな。いつ竿が倒れたか、ミーシャがいつ目覚めたかにかかってくるね。」

「お母さんに怒られないように、とっさに考えた口実というわけか。」

「そういう理屈は大人の考えすぎかもしれないけど、要するに、この話、いろいろと含蓄があるよねえ。」